

Figure 4.
16S rRNA マチラーーゼ

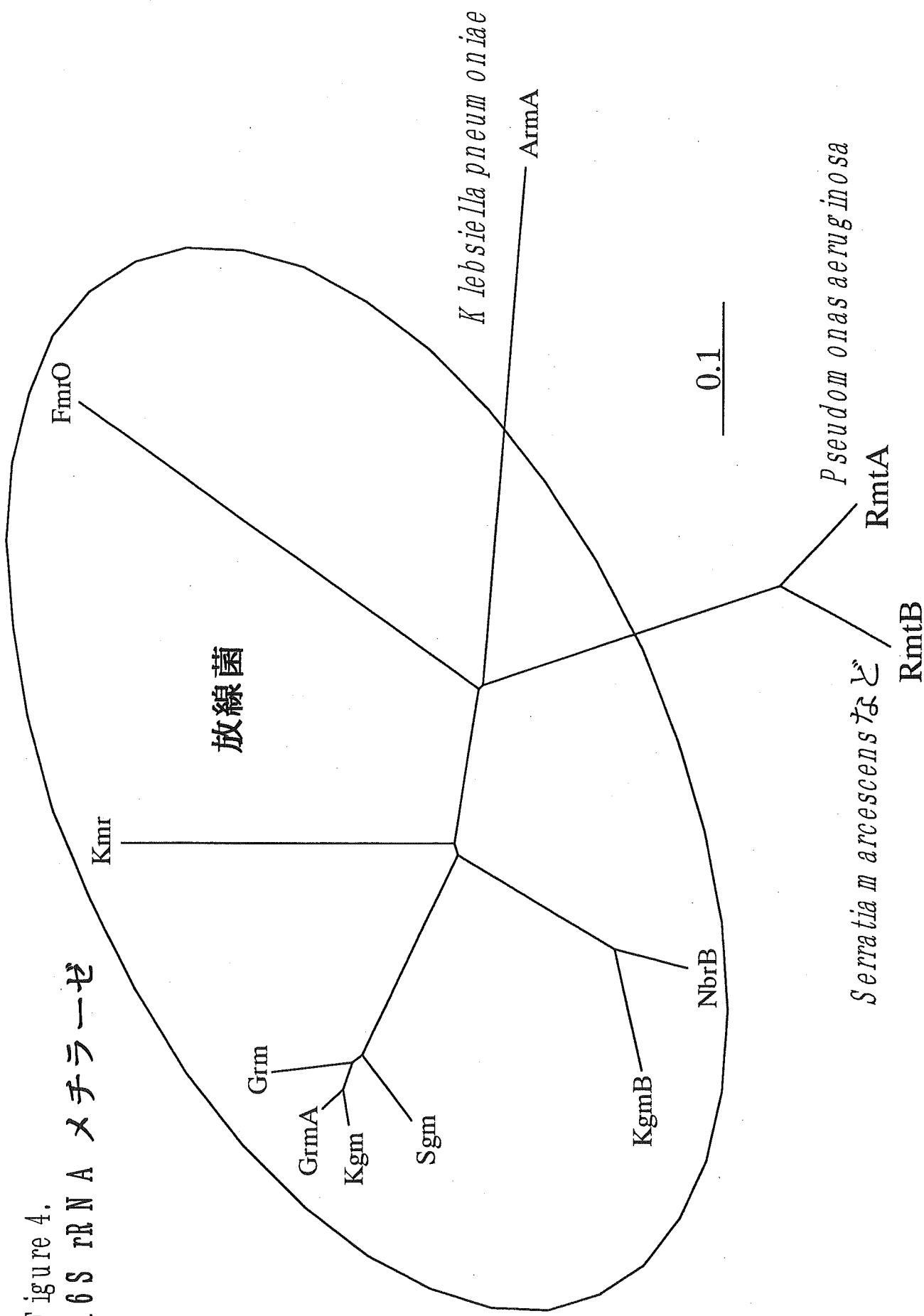
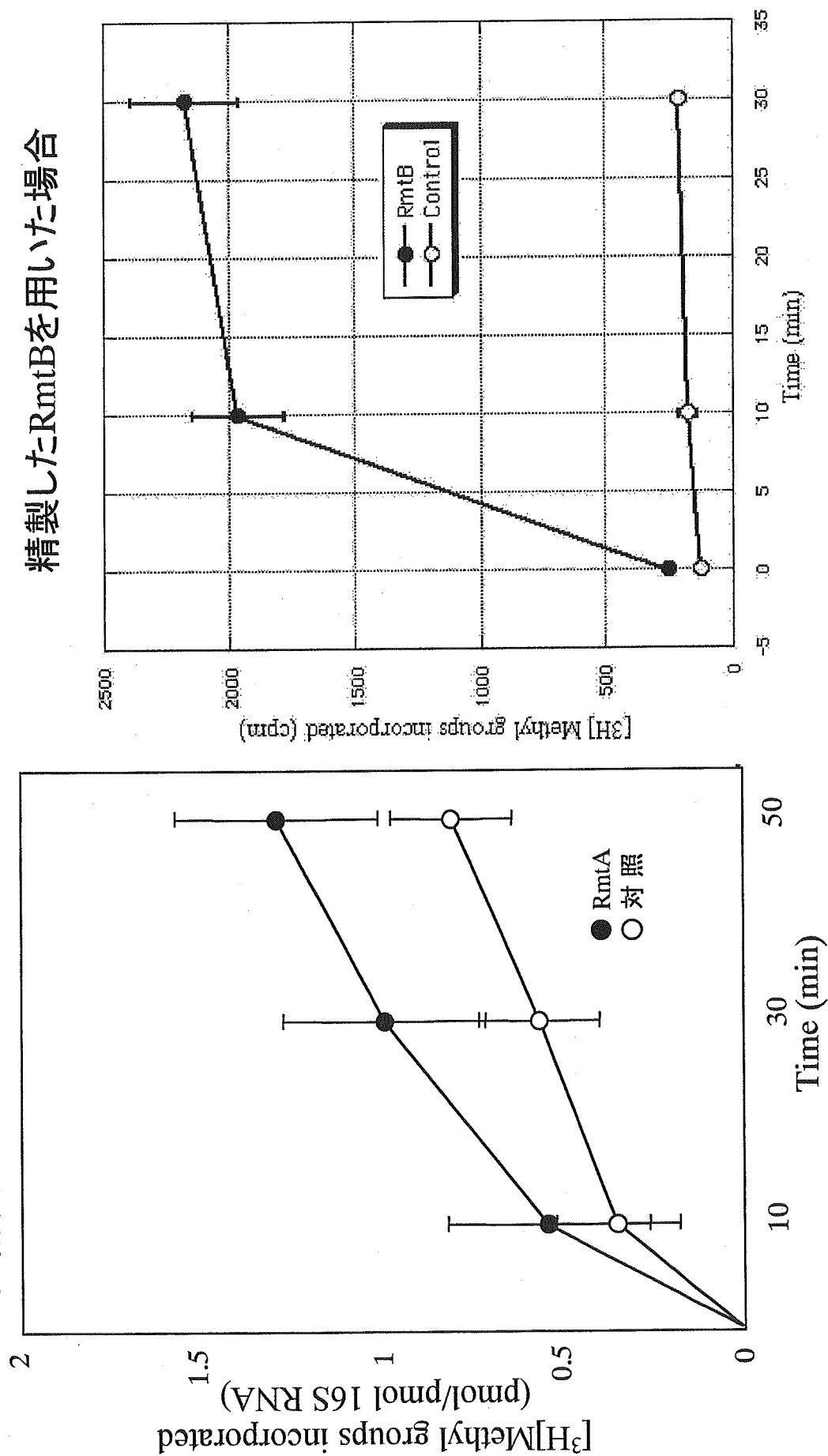


Figure 5. [^3H]ラベルしたS-アデノシルメチオニンを基質とし、メチル化反応を測定

粗精製のRmtAを用いた場合

精製したRmtBを用いた場合



厚生労働科学研究費補助金（新興・再興感染症研究事業）

平成15年度分担研究報告書

新型の薬剤耐性菌のレファレンス並びに耐性機構の解析及び
迅速・簡便検出法に関する研究
—国内で分離されたメタロ- β -ラクタマーゼの遺伝子型別—

分担研究者 荒川宜親 国立感染症研究所 細菌第二部

研究要旨

近年、カルバペネム耐性を獲得したセラチアや緑膿菌の臨床分離株の増加が問題となっている。特に、カルバペネム高度耐性を獲得した株としては、メタロ- β -ラクタマーゼ(MBL)と呼ばれる特殊な金属酵素を産生する株が、各地の医療施設から分離され問題となっている。そこで、2001～2002年に国内の医療施設で分離された、広域 β -ラクタム薬耐性株におけるMBLの産生状況やその遺伝子型別を試みた。

その結果、MBLの産生性を獲得した菌種としては、*Pseudomonas aeruginosa*(緑膿菌)、*Pseudomonas ptida/fluorescens*などが多く、その他、*Alcaligenes*, *Acinetobacter*, *Burkholderia cepacia*などのブドウ糖非発酵菌でMBL産生菌が多い傾向が見られた。一方、腸内細菌では、*Serratia marcescens*, *Klebsiella pneumoniae*, *Escherichia coli*, *Enterobacter*, *Citrobacter*などで、MBL産生株が確認された。MBLの遺伝子型としては、IMP-1型が最も多いが、欧州で多く報告されているVIM-2型MBL産生株も各地から分離される傾向が見られた。また、少数ではあるがIMP-2型MBL産生株も確認された。

我が国においてMBLを産生する株が、各種の病原性グラム陰性桿菌に広がりつつある事が確認されたため、今後の広がりを監視するとともにそれらを増やさないための実効性のある対策を急ぐ必要がある。

研究協力者：

柴田尚宏、山根一和、和知野純一、土井洋平、
八木哲也、柴山恵吾、加藤はる、甲斐久美子
(国立感染症研究所 細菌第二部)

ペネム-ベタミプロン(PAPM/BP)、メロペネム(MEPM)、ビアペネム(BIPM)などは、日本で開発されたカルバペネム系抗生物質で、グラム陽性菌からグラム陰性菌に至るまで幅広い抗菌活性を示すことを特徴としている。国内では、1987年にIPM/CS、1993年にPAPM/BP、1995年にMEPM、2001年にBIPMと各種のカル

A. 研究目的

イミペネム-シラスタチン(IMP/CS)、パニ

バペネム薬が相次いで認可され、細菌感染症の治療薬として重要な役割を果たしている。しかし、院内感染症の起因菌として問題となっている *Pseudomonas aeruginosa* (緑膿菌) や *Serratia marcescens* などにおいて 1990 年代より IMP 高度耐性株 (MIC, >128 μg/ml) が国内の医療施設において散発的に分離されるようになり、荒川らは、*S. marcescens* の臨床分離株より IMP-1 型メタロ-β-ラクタマーゼ (MBL) を世界で最初に発見した。その後、国内各地の医療施設で MBL を產生するカルバペネム耐性株が散見されるようになり、現時点では国内ほぼ全ての都道府県の医療施設から MBL 产生株が報告される事態となっている。

そこで、国内の医療施設で分離された広域セファロスポリン耐性グラム陰性桿菌の產生する MBL の遺伝子型別を PCR により行った。

B. 研究方法

1. 試験に用いた菌株

2001 年 1 月より 2002 年 12 月までの間に国内の医療施設から検査の依頼のあった 978 株のグラム陰性菌のうち、セフタジジムとスルペラゾンとともに高度耐性 (MIC, ≥128 μg/ml) を獲得した 587 株(ただし *Acinetobacter baumannii* については、MIC, ≥16 μg/ml) について解析を行った。MBL の產生性を検出するため、メルカプト酢酸ナトリウム(SMA)による阻害試験をスクリーニング試験として実施した。

2. PCR 解析

表 1 に示す PCR 用プライマーを用いて PCR 解析を行った。

3. *intI3* 遺伝子陽性株の PFGE

クラス 3 インテグロンの特徴である *intI3* 遺伝子陽性株については、菌株の遺伝的関連性を確認する為、定法により PFGE 解析を行った。

C. 研究結果

セフタジジムとスルペラゾンとともに耐性を得た 587 株について、SMA を用いた MBL 產生性試験を実施した結果、431 株について陽性と判定された (Fig. 1, Table 2)。

そこで、その 431 株について Table 1 に示す PCR プライマーを用いて解析を行ったところ、Table 3 に示すように IMP-1, IMP-2, VIM-2 型 β-ラクタマーゼ遺伝子が各々検出された。

Table 3 に示すごとく、IMP-1 型 MBL は 357 株より検出され、*P. aeruginosa*, *Alcaligenes xylosoxidans*, *P. putida/fluorescens*, *S. marcescens*, *Acinetobacter baumannii* の順であった。VIM-2 型 MBL は 67 株より検出され、それらは全て *P. aeruginosa*, *P. putida/fluorescens* であった。IMP-2 型 MBL 产生株は 7 株であったが、それらは、*P. aeruginosa*, *A. baumannii*, *A. lwoffii* であった。

インテグロンの型別では、MBL 产生株 431 株の大半の 427 で *imI1* 遺伝子が確認されたが、4 株の *P. putida* からは *intI1* と *intI3* の両方の遺伝子が検出された (Table 4)。また、それらは、IMP-1 型 MBL を产生する株であった (Table 5)。

intI1 と *intI3* の両方の遺伝子を保有する *P. putida* は、西日本の 2 つの医療施設より分離されたが、1 施設より分離された 3 株は、

同じ PFGE パターンを示した(Fig. 2)。

D. 考 察

今回の調査により、国内で臨床分離されるグラム陰性桿菌の中には、既に IMP-1 型 MBL 产生株が広く分布し、さらに欧米で多く分離されている VIM-2 型 MBL 产生株も各地の医療施設に分布している明かとなった。また、IMP-2 型は少數に留まるものの、*Acinetobacter baumannii* で IMP-2 型 MBL 产生株が検出された事から、今後さらに、*P. aeruginosa* やその近縁の *P. putida/fluorescens* を含むブドウ糖非発酵菌群における MBL 产生株の増加を警戒する必要がある。また、*Serratia marcescens* のみならず、*Klebsiella* 属菌や *E. coli* などの腸内細菌科でも、MBL 产生株が各地より分離されつつあり、今後の動向に注意する必要がある。

我が国で最初に確認されたクラス 3 のインテグロンは、今回の調査では未だ稀な状態である事が確認されたが、最近、海外でもクラス 3 のインテグロンを保有する *Klebsiella pneumoniae* が報告(EMBL accession No. AY219651)されており、今後、各種の耐性遺伝子を媒介しつつ増加する事が懸念される。

MBL を产生することで、「切り札」的な抗生物質であるカルバペネムをはじめ、セファマイシンや広域セファロスポリンに耐性を獲得した緑膿菌やセラチアなどのグラム陰性桿菌を増加させないために、今後もそれらの継続的監視とともに抗菌薬の適正使用の推進が強く望まれる。

E. 結 論

本研究により、国内で分離されるカルバペネム耐性の緑膿菌やセラチアが产生する MBL の遺伝子型が概ね把握された。

院内感染症や術後感染症の原因菌である緑膿菌およびセラチアにおいて、臨床現場で使用頻度が高いカルバペネム系抗生物質に対し高度耐性を付与する、MBL の产生能力を獲得した臨床分離菌の出現は、化学療法実施の上で将来極めて深刻な影響を及ぼすことが懸念される。また、これらの遺伝子がプラスミド上に存在することから、今後、さらに各種のグラム陰性桿菌において MBL 遺伝子の伝播拡散の危険性が強く懸念される。

F. 健康危険情報

我々の予備調査では 2001-2002 年の 24 ヶ月間に臨床分離された広域 β-ラクタム薬耐性の緑膿菌など 978 株中、少なくとも 431 株がメタロ-β-ラクタマーゼ(MBL)の遺伝子を保有している事が判明した。MBL 遺伝子を保有する株は、カルバペネムやセファマイシンなどの臨床的に重要な β-ラクタム薬に広範な耐性を示す傾向があり、それらの増加は、臨床上大きな問題となる。したがって、今後も引き続き、MBL 产生株の動向を監視するとともに、抗菌薬の適正使用も含め、実効ある対策を亟々必要がある。

G. 研究発表

1. 論文発表

3. Shibata N, Doi Y, Yamane K, Yagi T, Kurokawa H, Shibayama K, Kato H, Kai

K, Arakawa Y. PCR Typing of Genetic Determinants for Metallo- β -Lactamases and Integrases Carried by Gram-Negative Bacteria Isolated in Japan, with Focus on the Class 3 Integron. *J Clin Microbiol.* 2003 Dec;41(12):5407-13.

2. 学会発表

1. 当院で分離されたメタロ- β -ラクタマーゼ産生菌の臨床的検討, 吉田耕一郎、二木芳人、宮下修行、小橋吉博、河口豊、荒川宜親、柴田尚宏、松島敏春, 日本化学療法学会, 2003
2. 当研究所におけるメタロ- β -ラクタマーゼ産生菌の検出状況, 飯田真佐栄、柴田尚宏、荒川宜親, 日本医学検査学会, 2003
3. 当院で分離したメタロ- β -ラクタマーゼ産生株 7 症例の臨床的検討, 中野学、井端英憲、柴田尚宏、荒川宜親, 日本感染症学会, 2003
4. IMP-1型メタロ- β -ラクタマーゼ遺伝子を担うクラス 3 型インテグロン構造の解析, 和知野純一、柴田尚宏、土井洋平、山根一和、八木哲也、横山佳子、柴山恵吾、黒川博史、伊藤秀郎、荒川宜親, 日本細菌学会, 2003
5. *Pseudomonas putida* におけるクラス 3 型インテグロンに担われるメタロ- β -ラクタマーゼ遺伝子の解析, 柴田尚宏、和知野純一、土井洋平、山根一和、八木哲也、横山佳子、柴山恵吾、黒川博史、荒川宜親, 日本細菌学会, 2003
6. Genotyping of Metallo- β -Lactamases

Produced by Chryseobacterium and Myeroides Species in Japan. N. Shibata, Y. Doi, H. Kurokawa, T. Yagi, K. Shibayama, Y Arakawa, 103rd ASM General Meeting. 2003

H. 知的所有権の出願・登録状況

1. 特許取得

特記すべきものなし

2. 実用新案登録、その他

特記すべきものなし

表1 メタロ- β -ラクタマーゼとインテグラーゼを検出するPCRプライマー

PCR primer for	Sequence	Expected size of amplicon (bp)	Reference
MBL gene			
<i>blaIMP-1</i>	F1: 5'-ACC GCA GCA GAG TCT TTG CC-3' R1: 5'-ACA ACC AGT TTT GCC TTA CC-3'	587	Shibata, N. et al.
<i>blaIMP-2</i>	F2: 5'-GTT TTA TGT GTA TGC TTC C-3' R2: 5'-AGC CTG TTC CCA TGT AC -3'	678	Shibata, N. et al.
<i>blaVIM-1</i>	F3: 5'-AGT GGT GAG TAT CCG ACA G-3' R3: 5'-ATG AAA GTG CGT GGA GAC-3'	261	Tsakris, A. et al.
<i>blaVIM-2</i>	F4: 5'-ATG TTC AAA CTT TTG AGT AAG-3' R4: 5'-CTA CTC AAC GAC TGA GCG-3'	801	Poirel, L. et al.
<i>blaSPM-1</i>	F5: 5'-GCG TTT TGT TTG TTG CTC-3' R5: 5'-TTG GGG ATG TGA GAC TAC-3'	786	Shibata, N. et al.
integrase gene			
<i>intI1</i>	F6: 5'-GCA TCC TCG GTT TTC TGG-3' R6: 5'-GGT GTG GCG GGC TTC GTG-3'	457	Shibata, N. et al.
<i>intI2</i>	F7: 5'-CAC GGA TAT GCG ACA AAA AGG T-3' R7: 5'-GTA GCA AAC GAG TGA CGA AAT G-3'	789	Shibata, N. et al.
<i>intI3</i>	F8: 5'-ATC TGC CAA ACC TGA CTG-3' R8: 5'-CGA ATG CCC CAA CAA CTC-3'	922	Shibata, N. et al.
co-amplification of the			
<i>intI3</i> - <i>blaIMP-1</i> region	F9: 5'-GGT CTT GTA GGC TGT AAT TG-3' R9: 5'-TTG TGG CTT GGA ACC TTT AC-3'	609	Shibata, N. et al.

Shibata, N. et al., 2003. J. Clin. Microbiol. 41:5407-5413.

Tsakris, A. et al., 2000. J. Clin. Microbiol. 38:1290-1292.

Poirel, L. et al., 2000. Antimicrob. Agents Chemother. 44:891-897. ただし論文のシークエンスに誤植があるため修正したものを示す。

TABLE 2. Results of screening tests using SMA disk

Bacterial species	SMA (+)	SMA (-)	Total
<i>Pseudomonas aeruginosa</i>	180	48	228
<i>Pseudomonas putida/fluorescens</i>	55	1	56
<i>Alcaligenes xylosoxidans</i>	53	0	53
<i>Serratia marcescens</i>	47	9	56
<i>Acinetobacter baumannii</i>	35	13	48
<i>Klebsiella pneumoniae</i>	23	16	39
<i>Escherichia coli</i>	17	40	57
<i>Enterobacter cloacae</i>	5	8	13
<i>Burkholderia cepacia</i>	5	2	7
<i>Citrobacter freundii</i>	3	8	11
<i>Klebsiella oxytoca</i>	2	4	6
<i>Providencia rettgeri</i>	2	0	2
<i>Alcaligenes faecalis</i>	1	0	1
<i>Morganella morganii</i>	1	2	3
<i>Acinetobacter lwoffii</i>	1	1	2
<i>Enterobacter aerogenes</i>	1	3	4
<i>Proteus</i> spp.	0	1	1
Total	431	156	587

TABLE 3. Number of strains of each MBL type among SMA-test positive strains

Bacterial species	IMP-1	IMP-2	VIM-2	Netative	Total
<i>Pseudomonas aeruginosa</i>	116	1	63	0	180
<i>Pseudomonas putida/fluorescens</i>	51	0	4*	0	55
<i>Alcaligenes xylosoxidans</i>	53	0	0	0	53
<i>Serratia marcescens</i>	47	0	0	0	47
<i>Acinetobacter baumannii</i>	30	5	0	0	35
<i>Klebsiella pneumoniae</i>	23	0	0	0	23
<i>Escherichia coli</i>	17	0	0	0	17
<i>Enterobacter cloacae</i>	5	0	0	0	5
<i>Burkholderia cepacia</i>	5	0	0	0	5
<i>Citrobacter freundii</i>	3	0	0	0	3
<i>Klebsiella oxytoca</i>	2	0	0	0	2
<i>Providencia rettgeri</i>	2	0	0	0	2
<i>Alcaligenes faecalis</i>	1	0	0	0	1
<i>Morganella morganii</i>	1	0	0	0	1
<i>Acinetobacter lwoffii</i>	0	1	0	0	1
<i>Enterobacter aerogenes</i>	1	0	0	0	1
Total	357	7	67	0	431

* These strains were re-identified as *P. putida*.

TABLE 4. Combination of MBL and *intI* genes among all SMA-test positive strains

Type of MBL	Type of integrase gene		
	<i>intI1</i>	<i>intI1+intI3</i>	Total
IMP-1	353	4*	357
IMP-2	7	0	7
VIM-2	67	0	67
Total	427	4	431

* Re-identified as *P. putida*.

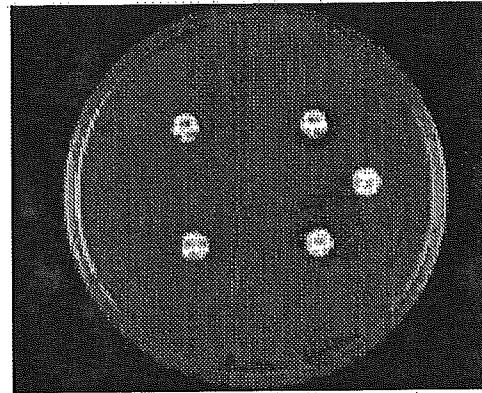
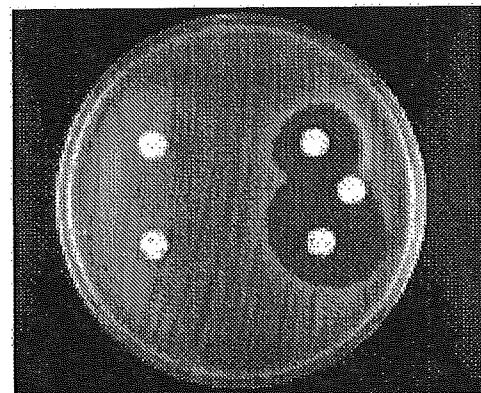
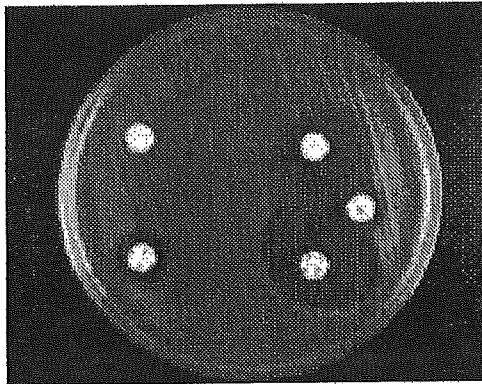
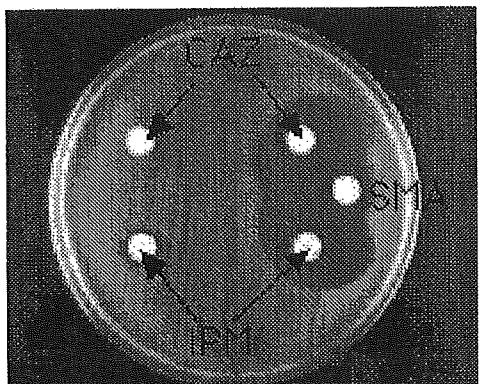
TABLE 5. Combination of MBL and *intI* genes in *Pseudomonas putida/fluorescens*

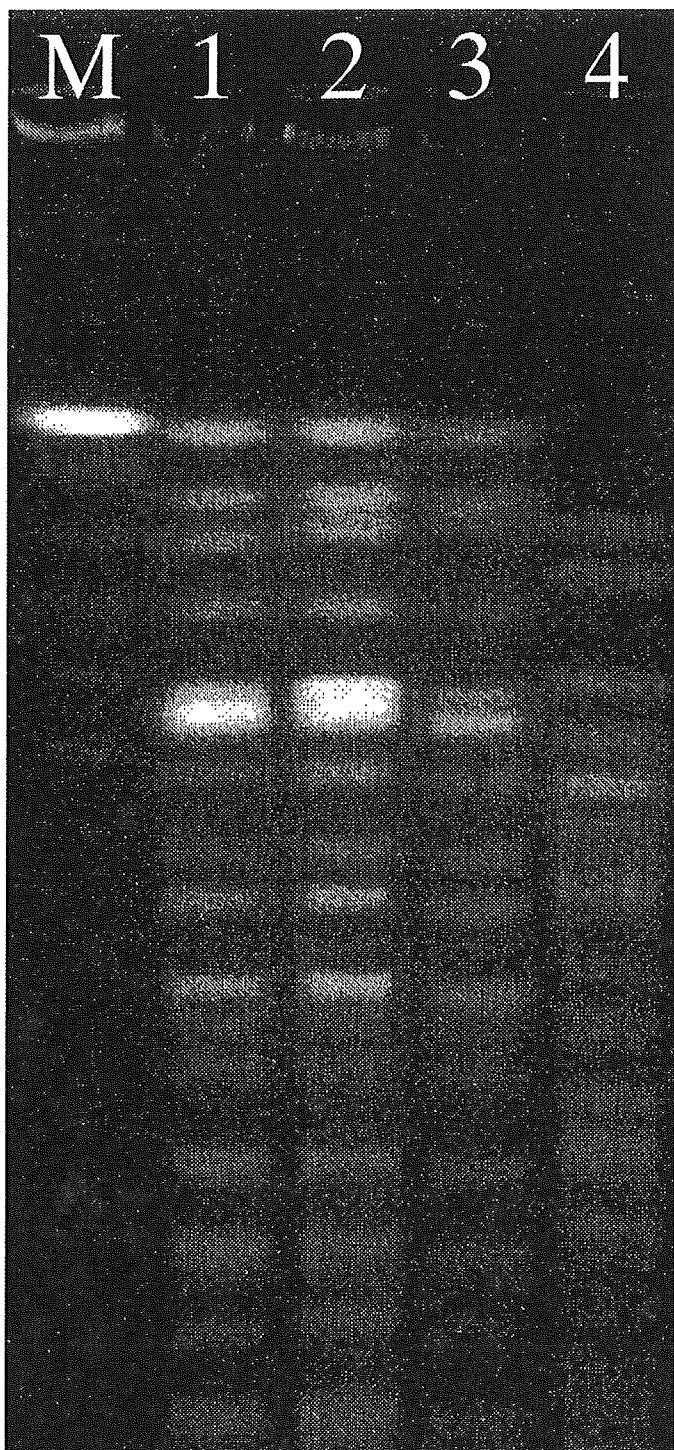
Type of MBL	Type of integrase gene		
	<i>intI1</i>	<i>intI1+intI3</i>	Total
IMP-1	47	4*	51
VIM-2	4*	0	4
Total	51	4	55

* Re-identified as *P. putida*.

TABLE 6. Clinical associations of *Pseudomonas putida* carrying both *intI1* and *intI3* genes

Strain No.	Age	Sex	Disease	Specimen	Hospital	Date of isolation	Prefecture
NCB 01-121	77	male	prostatic cancer	urine	A	06/2001	Mie
NCB 02-182	79	male	cerebral infarction	urine	A	05/2002	Mie
NCB 02-190	66	female	cerebral infarction	sputum	B	05/2002	Mie
NCB 02-204	76	female	gallbladder cancer	biliary tract drainage tube	A	06/2002	Mie





(kbp)

• 485

• 242.5

• 48.5

厚生労働科学研究費補助金（新興・再興感染症事業）分担研究報告書

新型の薬剤耐性菌のレファレンス並びに耐性機構の解析及び迅速・簡便検出法に関する研究

日本で初めて分離された VanD 型 VRE の解析

主任研究者 池 康嘉^{1, 2}

研究協力者 谷本 弘一²、野村 隆浩¹、富田 治芳¹、藤本 修平¹

群馬大学大学院 医学系研究科 生体防御機構学講座 細菌感染制御学¹、

群馬大学医学部附属薬剤耐性菌実験施設²

研究要旨 バンコマイシン耐性腸球菌（vancomycin resistant enterococci, VRE）は vancomycin (VCM) および teicoplanin (TEIC) の耐性値、または VCM 耐性遺伝子構造の違いにより、これまで 6 種類が報告されている。それらは獲得耐性 VRE の VanA、VanB、VanD、VanG、VanE 型、自然耐性の VanC 型 (C1, C2, C3) である。臨床上問題となるのは、VanA、VanB、VanD 型で、これらは D-Ala⁴, D-Lac⁵ ligase 遺伝子をコードし、他の型は D-Ala⁴, D-Ser ligase 遺伝子をコードする。VanA、VanB、VanD 型の中で VanA および VanB 型 VRE は一般的に分離されるが、VanD 型はこれまで世界で数例の報告のみである。日本で臨床分離された *E. raffinosus* VanD VRE の抗菌薬 MIC は、VCM (1,024 µg/ml)、TEIC (256 µg/ml)、GM (2,048 µg/ml)、EM (2,048 µg/ml)、ABPC (32 µg/ml) と、高度多剤耐性であった。ligase 遺伝子の PCR 産物の塩基配列から、この株の ligase 遺伝子は VanD 型 VRE の VanD1, D2, D3, D4 の中で VanD4 型に相同意が高かった。既に報告されている VanD4 型の ligase 遺伝子の違いは、1,032 塩基中、2 ケ所の塩基が異なっていた。また、タンパクのアミノ酸は 1 ケ所が異なっていた。VanD4 遺伝子は染色体性で、遺伝子発現は恒常的に発現されていた。

A. 研究目的

腸球菌はヒト、動物の腸管常在菌で、典型的な日和見感染菌である。10 数種類の菌種があるが、臨床分離腸球菌は主として *E. faecalis* と *E. faecium* である。バンコマイシン耐性腸球菌（Vancomycin resistant enterococci, VRE）は腸球菌の中で Vancomycin (VCM)

獲得耐性または自然耐性菌である。高度 VCM 耐性 VRE (VanA 型) は、1988 年に英国とフランスで報告され、続いて 1989 年に米国で報告された。以来、欧米において環境、医療現場で VRE が広がり、大きな問題となっている。特に米国においては、大規模病院において、集中治療室 (ICU) や外科治療ユニット、臓器移植ユニットなど、感染防御能力の低下し

た患者（易感染患者）の治療を行う部署や、日和見感染症や術後感染症、さらに院内感染症の起因菌として警戒されている。これまでに 6 種類のバンコマイシン耐性腸球菌が報告されている（表1、図1）。それらは、獲得耐性 VRE の VanA、VanB、VanD、VanG、VanE 型、自然耐性の VanC 型（C1、C2、C3）である。臨床上問題となるのは高度 VCM 耐性の A、B、D 型である。今回、世界的に数株の報告しかない VanD 型 VRE（表2）の日本の臨床分離例について報告する。

B. 研究方法

材料および方法

用いた菌株：臨床分離 VanD 型 VRE *E. raffinosus*, 実験株として *E. faecalis* FA2-2 (Rif^r, Fus^r) , *E. fecium* BM4105RF (Rif^r, Fus^r) .

用いた培地：Todd Hewitt Broth (TBH), Mueller Hinton (MH) 培地, 薬剤感受性 MIC 測定は、NCCLS 標準法による。Mueller Hinton 培地を用いた寒天希釈法を用いた。

薬剤耐性の接合伝達は Filter mating 法を用いた。Southern hybridization および Northern hybridization は非 RI 系を用い、プローブは PCR により増殖された断片をアガロースゲルから抽出して用いた。菌種の同定は、同定用キットおよび 16sRNA シークエンス解析に拠った。

C. 結果・考察

菌株の分離

2002 年 9 月、原疾患として糖尿病を持つ 73 歳の男性の両下肢壊死褥創部および便より分離された腸球菌が VRE であった。

VRE の菌種と MIC

菌種は *E. raffinosus* であった。各種薬剤に対する MIC は、VCM (1,024 µg/ml) 、TEIC VCM (256 µg/ml) 、GM (2,048 µg/ml) 、KM (2,048 µg/ml) 、SM (1,024 µg/ml) 、EM (2,048 µg/ml) 、TC (1,024 µg/ml) 、ABPC (32 µg/ml) であった。各種薬剤に高度耐性で VCM、TEIC 両薬剤に高度耐性であることから、VanA 型または VanD 型 VRE が推測できた。

VCM 型別

VanA、*VanB*、*VanC*、*VanD1*、*VanE* に特異的なプライマーを用いて PCR を行ったが、これらの VRE に相当する PCR 産物は得られなかった。大腸菌の *ddlA*、*ddlB* (*ddl*, d-Ala-d-Ala ligase) と VRE の VanA 型 ligase の間で相互に共通に保存されているアミノ酸から設計されたプライマーを用いて PCR を行った。その結果、增幅された DNA 断片を検出することができた。このプライマーを用いて直接シークエンスした結果、VanD4 と他界相同意性が確認された。以上の結果、分離された VRE は VanD 型 VRE の中で VanD4 と相同性の高い VRE であると推測された。

VanD4 ligase 遺伝子との比較

これまでに VanD4 型 VRE は 1 株の報告例がある。その塩基配列を参照し、PCR とシークエンスを行った。ligase 遺伝子の塩基配列を決定した。その結果、全部で 1,032 塩基中、2 ヶ所の塩基が異なっていた（図2）。VanD4 の 362 番目の G が T に、930 番目の C が T と変化していた。推測される ligase 蛋白のアミノ酸は、VanD4 の Gly が Val に変化し、930 番目の塩基の変化によるアミノ酸の変化は無かった。以上の結果、分離された VRE は

VanD4 VRE で *VanD4* と ligase 遺伝子の塩基が 2 ケ所、アミノ酸で 1 ケ所、すでに報告されている VanD4 と異なるものであることが解った（表 3）。

パンコマイシン耐性の接合伝達性とプラスミド

受容菌 *E. faecalis* FA2-2 または *E. faecium* 4105RF に filter mating によるパンコマイシン耐性の接合伝達実験を行ったが、いずれの菌にもパンコマイシン耐性は伝達されなかつた。プラスミドの分離を行つたが、明らかなプラスミドは分離できなかつた。以上の結果、VanD4 遺伝子は染色体上に存在すると推測された。

パンコマイシン耐性の誘導性

パンコマイシン耐性遺伝子解析は、パンコマイシンにより誘導されることが知られている。パンコマイシンの存在の有無により Northern hybridization を行い、転写産物を調べた結果、この VRE ではパンコマイシンの有無に関らず転写産物が検出された。この結果 VanD4 遺伝子は恒常的に発現していることが解った（図 3）。

E. 結論

高度パンコマイシン耐性腸球菌(VRE)は、VanA、VanB、VanD 型が存在する。VanA、VanB 型は臨床分離の多い菌である。VanD 型は稀な VRE で、これまで世界で数例の報告のみである。日本で臨床分離された VRE で、VanD 型の中で、VanD4 型の VRE が発見された。

特記すべき事項なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Tomita H, Tanimoto K, Hayakawa S, Morinaga K, Ezaki K, Oshima H, Ike Y. Highly conjugative pMG1-like plasmids carrying *Tn1546*-like transposons that encode vancomycin resistance in *Enterococcus faecium*. J Bacteriol. 2003;185(23):7024-8.

H. 知的所有権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録、その他

なし

F. 健康危険情報

表1 バンコマイシン耐性腸球菌の分類

VRE遺伝子型	VanA	VanB	VanC	VanD	VanE	VanG
MIC(μg/ml)	VCM 64～>1000	4～>1000	2～32	64～>1000	16～24	12～16
TEIC	0.5～256	<0.5～8	0.5～1	4～256	0.5	0.5
耐性遺伝子存在部位	プラスミド・染色体	染色体・プラスミド	染色体	染色体	染色体	染色体
Ligaseで合成されるプロダクト	D-Ala-D-Lac	D-Ala-D-Lac	D-Ala-D-Ser	D-Ala-D-Lac	D-Ala-D-Ser	D-Ala-D-Ser?
分離菌種	<i>E.faecium</i>	<i>E.faecalis</i>	<i>E.gallinarum</i>	<i>E.faecium</i>	<i>E.faecalis</i>	<i>E.faecalis</i>
	<i>E.faecalis</i>	<i>E.faecium</i>	<i>E.casseliflavus</i>	<i>E.raffinosus</i>		
	<i>E.avium</i>		<i>E.flavescens</i>			
	<i>E.durans</i>					
	<i>E.gallinarum</i>					
	<i>E.casseliflavus</i>					
Ligase遺伝子	<i>vanA</i>	<i>vanB1</i>	<i>vanC1</i>	<i>vanD1</i>	<i>vanE</i>	<i>vanG</i>
		<i>vanB2</i>	<i>vanC2</i>	<i>vanD2</i>		
		<i>vanB3</i>	<i>vanC3</i>	<i>vanD3</i>		
						<i>vanD4</i>

表2 VanD 分類

Ligase 遺伝子	MIC		耐性遺伝子存在部位	菌種	国
	VCM(μg/ml)	TEIC(μg/ml)			
VanD1	16	4	染色体	<i>E.faecium</i>	アメリカ
VanD2	128	4	染色体	<i>E.faecium</i>	アメリカ
VanD3	256	64	染色体	<i>E.faecium</i>	カナダ
VanD4	256	4	染色体	<i>E.faecium</i>	ブラジル

表3 VanD Ligase の相同意性

Ligase	% Amino acid identity					
	VanD4	VanD1	VanD2	VanD3	VanA	VanB
VanD4	100	85	84	83	68	68
VanD1	100	96	97	68	67	
VanD2		100	96	67	67	
VanD3			100	68	67	
VanA				100	75	
VanB					100	

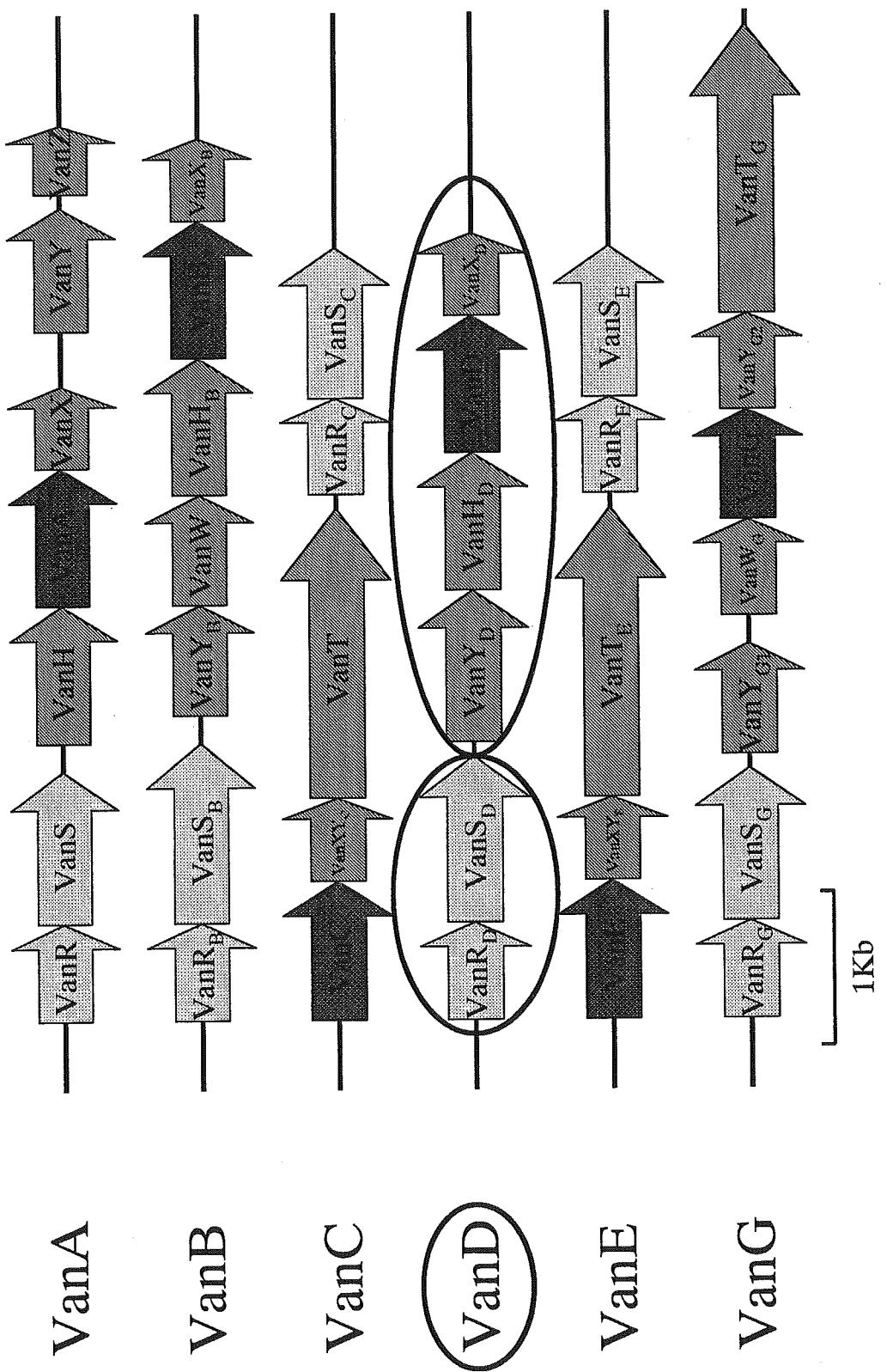


図1 各種バニコマイシン耐性遺伝子の遺伝子構成